



『新学科長の挨拶』

英語学科長 小塩 和人

2008年4月1日をもって英語学科長に就任しました小塩和人です。1958年東京生まれ。カリフォルニア大学大学院修了（Ph.D., History）、日本女子大学文学部教授を経て、2007年4月に赴任致しました。主著は『水の環境史』（玉川大学出版部、2003年、日本アメリカ学会清水博賞）。英語学科では米国史概説などを担当し、アメリカ・カナダ研究所副所長も兼任しております。

教室では「知の受容者」からの脱却を訴えています。たとえば、歴史は暗記科目、しかも教科書に書かれている「事実」が唯一絶対だと考えられがちです。しかし、実際には因果関係の複雑さや解釈の多様性が隠されています。だからこそ、大学で教えられるのは「至論」ではなく「試論」であり、「知の創造者」を目指す事が大切だ、と説いているわけです。

歴史学のように保守的な学問領域も変革の荒波を受けています。たとえば、私が関わっている環境史という分野は、人文・社会・自然科学を横断する形で展開してきました。新しい模索は『サステナブルな社会をめざして』（春風社、2008年）からも垣間見て頂く事ができましよう。蛸壺に閉じこもる事なく、外へと開いていく時が来ています。

変動する時代の要請に応じて、英語学科の学生たちも、学科や学部を越えて、多様な学びを実践しています。たとえば、必修科目による拘束ではなく、自らの知的好奇心に従って、カリキュラムを構築する自由があります。「世界に並び立つ大学」を標榜する本学で、新しいフロンティアを切り開いてくれる事を願っています。

こうしたソフィアンたちの成長を見守って下さる皆様のご支援が不可欠です。半世紀にわたって築き上げられてきた伝統と新しさを追い求める力を融合させれば、英語学科はますます発展していく事が可能となりましよう。どうか同窓会が英語学科の学生たちにとって良き導き手となって下さいますよう、学科を代表してお願い致します。

『近況報告など-41年ぶりに-』

川上 雅弘 (昭和42年卒)



教員生活も2年前の平成18年3月末で定年退職を迎えまして、私のような上智大学英語学科の劣等性がよくぞ定年まで辿り着いたものだと感じが尽きません。退職時には職場で最終講義をせよということでしたので、上智で40年前に学んだ懐かしい古英語訳の「主の祈り」を取り上げて、そこに表された古英語の言語学的な現象について話をしまして、余りの時間は学生時代の思い出話をしました。最終講義の後で、親しい同僚が「後半の思い出話の方が面白かった。古英語の話はなくてもよかったのでは」と言っていました。

退職と同時にどうしたわけか名誉教授という称号を押しつけられまして、時々会議に呼び出されています。退職後は静かな隠居生活をと望んでいたのですが、そうはなりません、地域(多摩市)の人々との交流等でバタバタと、みっともない日々を送っています。お陰で退屈ということは知らずしておりますが、毎日賢くなるので弱ります。

実は、私は15歳頃までほとんど口をききませんで、学校もちゃんと通い始めたのは中学3年生からのことでした。家族の者から「口をききなさい」とか「学校に行きなさい」とか言われた覚えが全くありません。小学校6年生頃には、さすがに親も心配になったのでしょう、東京都立の養護学校を探してきてくれました。当時は病弱介護の養護学校が2校ありまして、それらの全寮制の学園で計3年間過ごしました。初めて英語に接したのは養護学校でありました。そのような私が上智の英語学科に辿り着いたのですから、人間生きてると面白いことが起こりますね。話は尽きませんが、最後に、原稿依頼を下されたSELDA A会報の編集委員会の方に感謝をいたします。

吉川 愛（旧姓：柴田 愛）（平成10年卒）



思い返してみると、私は一度も授業を休んでいないような気がします。まじめに勉強にいそしみ、スポーツに打ち込んだ上智での日々でした。特に所属していた「ロリポップス」でチアリーディングにのめりこんでいた日々は本当に私の青春そのものでした。

1998年に卒業、NHKに番組ディレクターとして入局しました。男性ばかりの職場。それまでは、どちらかというと女性がマジョリティの環境（上智でも）でしたので、とにかく男性に負けまいと気合を入れ“まくっていた”新人時代でした。NHKでは、新人はすぐに地方局へ赴任します。私は福岡放送局に配属されま

した。「のど自慢」から「クローズアップ現代」まで、様々な仕事に携わり、文字通り走り回りました。この福岡での5年間は、私の価値観が大変化を遂げた時期でもありました。これまで学生として、いかに自分が守られた環境で、のほほんと幸せに過ごしていたのかを気づかされる毎日でした。それまでは知ることなかった様々な人たち、生き方、歴史、そして風景までもが、自分の考え方や物の見方を変貌させていきました。

2003年に東京の本局へ異動し、青少年子ども番組という部署で主に「真剣十代しゃべり場」という番組の制作に専念しました。タイトルの通り、十代の子どもたちがテレビスタジオにつどい、学校生活や生き方など様々なテーマについて“トークバトル”を展開するという番組です。テレビで物申したいという士気の高い十代の若者たち何十人と出会い、その満ち溢れるエネルギーに圧倒されながらも、やりがいを感じながら番組制作に没頭しました。

現在、家庭では夫と1歳半の息子と3人で暮らし、職場では「週刊子どもニュース」という番組を担当しています。時事ニュースを、小学生や中学生向けに分かりやすく伝える番組です。仕事と子育ての両立という人生の新たな課題と向き合い、奮闘している毎日です。

走り続けてきたディレクター生活ですが、忙しい仕事の合間に時折上智を訪れる機会があります。それは、チアリーディングの後輩の練習を見に行くためです。上智大学に一步踏み入れた途端に、私の心は一気に学生時代戻ります。勉強やスポーツ、友人との時間だけを大切にしていた、あの学生時代が今でも私の心のスタミナの素、根性の源です。訪れる度、心をたっぷり充電して、また今の人生に戻っています。

卒業してから丸10年が経ちました。この先の10年も、きっと走り続ける人生が私を待っていると思います。時折、四谷のキャンパスを訪れ、またエネルギーをもらいに行きたいと思っています！

卒業生短信

3月末までに事務局に届いたお便りを掲載いたします。(本文中では敬称を略しております。ご了承ください) 皆様からのお便りを募集しております。ご自身の近況、自著の宣伝等、なんでも結構です。同封の葉書に書いて、同窓会事務局までお送りください。

1998年卒業の森川貴史と申します。昨日、平成19年度公認会計士試験の合格発表でしたが、何とか全科目合格をしておりましたので、謹んでご報告させて頂ければと思います。

仕事を辞め勉強に専念し、今回が2度目の挑戦でしたのでハラハラドキドキの日々でしたが、ひとまず一括合格出来たことで本当にホッとしております。(しかし、ただでさえ出来なかった英語が、ますます出来なくなってしまいました。まさに、gaining through losingです。)

過去に米国公認会計士(USCPA)試験に合格させて頂いたこともあり、今後は、日・米の会計の専門家として一日も早く活躍が出来ますよう、日々精進・研鑽に励んで参りたいと思えます。

mailto:janduscpa@hotmail.co.jp

森川 貴史 (1998年卒)

2007年で八王子ソフィア会は8回目、日野ソフィア会は5回目となります。お近くのソフィアン、そして、地域にこだわらずソフィアンをお誘いの上ご参加ください。

石川 雅弥 (1965年卒)

石川雅弥前 SELDAA 会長退任慰労会
去る1月28日、「がんこ」銀座1丁目店で石川雅弥前 SELDAA 会長の会長退任に伴う慰労会が同期生有志によって開催されました。6年の長きに亘り、SELDAAのために尽力した石川氏のために同期生の友人が発案したもので、この日は、同期生の女性7名、男性10名が出席し、石川氏を慰労すると共に同期生同士の2008年の新年会および「生存確認会」の意味合いの会合と

もなり、お互いの元気と健康を祈念しました。石川氏には、慰労の記念品としてご本人の希望により上智大学の鷲のマークと大学名入りのパーカー(とても似合うと絶賛されました)とやはり鷲のマークのラベルのついた赤、白のワインが贈呈されました。

石川氏の SELDAA への多大な貢献のなかでも自ら陣頭に立ち、尽力した「同窓会活性化」の動きは未だに続いており、昭和40年卒同期会は定期的に開催されており、今年は11月15日に開かれる予定になっています。

一般的に同窓会に対する卒業生の関心が薄い事を内心は忸怩たる思いでいながら、自ら実行することで職務を全とうしようと努力を重ね、他にも傘寿を迎える神父様達のお祝いの席を設けたり、元々は SELDAA が主導していた「各国大使の講演会」がソフィア会主催となってからはサポートの重要な役割を果たすなど会長にふさわしい活躍をして来ました。石川氏の緻密さ、几帳面さ、正確さが遺憾なく発揮された6年間でした。

銀座の夜の一時、心ばかりの同期生の慰労に石川氏は満足の笑みをたたえて帰路につきました。

原岡 浩子 (1965年卒)

2007年は、『こんにちは、マクダフ』(アールアイシ - 出版)『ミミちゃんのねんねタオル』(徳間書店)『病気になるなら277の知恵』(阪急コミュニケーションズ)の3冊を上梓いたしました。どこかでお目に止まりましたら幸いです。

河本 裕子 (1990年卒業)

昭和58年に青山学院女子短大から編入し60年に卒業した大塚由美です。2年間しか在籍していなかったので、「思いで深い大学生活」とは言えませんが、卒業後医学部で秘書兼翻訳業務を経験後、思う所があって医学部に入学し平成6年に卒業した際には、3歳の娘の母でもあり、内科医師としてスタートしたばかりのヒヨコでした。

同じ医学部の夫と共に東京 大分 佐賀 福岡と転居しながら医師としての技量を磨き(?)平成16年末よりクリニックを開院。19年6月には「アンチエイジング外来」を併設した内科クリニックとしてリニューアルオープンしました。HPアドレスは<http://www.faa-otsuka.jp>ですので一度覗いてみて下さい。福岡県にお住まいの方で、体の内面(細胞レベル)からの若返り=病的老化を抑制し、より活動的でいられるようになりたい方、更には「がん」に罹患しながら有効な治療法がない方は一度ご相談ください。tel.092-874-8171

(医療法人 FAAおおつかクリニック)までどうぞ!

大塚 由美 (1985年卒)

84年卒業の櫻田大造と申します。現在は、西宮市の関西学院大学法学部で、「外交政策論」、「比較政治」、「総合コースカナダ」などを教えてつ、カナダ研究コーディネーターもやっております。08年3月に、講談社文庫の1冊として、『「優」をあげたくなる答案・レポートの作成術』という大学生・初学者向けの本を発売しました。特に最近多いのは、レポートでのネット情報のコピーペースト問題。そのような問題に対処しようと、編集と共に仕上げたのが、拙著です。タイトルは、え?と思われるかも知れませんが、また文体もイマドキの学生向けで

すが、中味は実はマジメです。(上智時代の体験談も織り込んであります。)もしもよろしければ、お読み頂き、コメントなどいただけたら嬉しいです。

櫻田 大造 (1984年卒)

No.46の会報を読んで大変驚きました。去る9月2日に逝きました主人の言葉が載っておりました。救急車で入院し肺炎の為、気管内挿管を一言の言葉もなく一週間で逝ってしまった主人の天国からの便りに思えました。明るい便りでなくさめられました。若き日々にご縁のありました皆様、ありがとうございました。

嵯峨山 雄也 (昭和34年卒)

内 嵯峨山 佐由美



心より御冥福をお祈り
申し上げます。
(SELDA)

「オールソフィアンの集い」で会いましょう 2008年度SELDAА総会と発足25周年記念 パーティーのお知らせ

今年も、「オールソフィアンの集い」に合わせてSELDAАの総会を開催します。総会では、活動報告、議案審議、今後の活動等についてお話しします。多くの会員のご参加をお待ちしております。尚、総会終了後、今年でSELDAАは発足25周年を迎えたので、その記念パーティーを予定しております。会費は無料、是非皆様お誘い合わせの上、お越してください。
久しぶりの母校で、楽しいひとときを過しましょう。

2008年度SELDAА総会および25周年記念パーティー
日時：2008年5月25日（日）
12:00～14:00
場所：1号館203号

SELDAАのホームページについて

英語学科同窓会が設立されたのは1983年。そして、今や、英語学科の卒業生は7500名を越えています。ホームページは2004年5月にリニューアルしました。「知らないなんてもったいない」をキーワードに、会員に対して同窓生の動向や英語学科の様子などのタイムリーな発信に努めています。まだご覧になっていない方は、是非覗いてみて下さい。

<http://seldaa.net>

20年以上に亘り毎年2回発行している第一号から最新号の会報誌までの全ページを閲覧することもできます。会員間の交流に、そして、情報収集のツールとしてご利用ください。

Free

Column

フリーコラム

サブプライムローン問題とバブル崩壊

会報担当 佐藤誠一郎

上記につき、今回は、諸般の事情により、記事が少なかったもので、私がフリーコラムという形で、何か英語圏の出来事で、日本に影響を及ぼしたことについて述べたいと思います。

後で、他に御意見のある方は、短信などで、寄稿して頂ければと思います。

さて、サブプライムローンとは、アメリカで利用されているローンの一つで、通常の融資を受けられる人々（プライム層）ではなく、信用力が低い低所得者の人々（サブプライム層）向けのものを言う。そして今、話題になっているのは、住宅ローンである「サブプライム住宅ローン」である。それは低所得者層を対象としている事から、返済が滞るリスクを考慮して、金利は高く設定されている。ただし、低所得者は高金利の借金をいきなり返済するのは困難なので、当初数年間の金利は低く設定され、徐々に高くなり、最終的には10%を超える設定となっている。そしてその利用者は、「保有する不動産が値上がりする」という予想で、低金利のローンへの借り換えが望めるという事で利用する。しかし、その後、FRBによる金利引き締め政策などもあり、住宅ローンの利用に歯止めがかかり、結果として不動産価格の伸びも鈍化していった。

その結果、ドル安となり、相対的に、円高となり、日本の一時的な株価の下落の一原因ともなっている。

かかる状況は、日本の1990年代前半のバブル崩壊後の、所謂、平成不況と基本的に同じだと思う。つまり、1980年代後半頃から、株や、土地への投機が盛んになり、なかでも「土地は必ず値上がりする」という所謂、土地神話に踊らされ、転売目的の売買が増加し、地価は高騰。銀行はその土地を担保に貸し付けを拡大し、資産価格高騰は、資産保有者に含み益をもたらし、心理的に財布のひもをゆるめる資産効果によって、消費が刺激され、景気の過熱感を高めた。しかし、その後、地価の変動により、地価は下落して、担保価値が低下して、不良債権をひき起こして、所謂、平成不況の一つの原因となった。

従って、今回のアメリカのサブプライムローン問題について、現地の当事者達は、10年前の日本の状況から何も教訓を生かせなかったという事だし、両者共に、「地価なんて言わば相場物なのだ」という認識がないという事だと思う。そこで、かかる状況を踏まえ、含み益を期待して、希望的観測をしたがる気持ちも分からぬではないが、上記の事を踏まえて、現実的な観測をすれば、国際経済も少しは安定した方向に進むのかなと思う次第である。

